



日本現代文學全集・講談社版

# 山本有三集

日本現代文學全集

55

山本有三集

編集  
伊藤 整  
龜井勝一郎  
中村光夫  
平野謙吉  
山本健吉



昭和36年12月10日 印刷  
昭和36年12月19日 發行

定價 450圓

© KŌDANSHA 1961

著者 <sup>やま</sup>山 <sup>もと</sup>本 <sup>ゆう</sup>有 <sup>ぞう</sup>三

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3-19  
電話大塚大代表 (941) 3111  
振替東京 3 9 3 0

印刷製大日本印刷株式會社  
版真印株式會社 興陽社  
製本株式會社 八通堂  
製函株式會社 岡山紙器所  
株式會社 第一紙藝社  
背革株式會社 石井  
表紙クロス日本クロス工業株式會社  
口繪用紙日本加工製紙株式會社  
本文用紙本州製紙株式會社  
函貼用紙安倍川工業株式會社  
見返し用紙三菱製紙株式會社  
扉用紙神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

山本有三集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

波……………五

ふしゃくしんみよう……………三五

真美一路……………一六五

無事の人……………三三八

同志の人……………三六三

ウミヒコ ヤマヒコ……………三七六

女人哀詞……………三六五

「復讐」や Sil……………四一九

一人一回かぎり	四四二
すわり	四四四
おみおつけ	四四六
沢田君	四四九
露伴翁の永眠に対して	四五二
作品解説	山本健吉 四五五
山本有三入門	高橋健二 四六〇
年譜	四六七
参考文献	四七七

山本有三集

冬  
カ  
山

有  
云

山  
ひ  
だ  
か  
深  
ま  
っ  
て  
ゆ  
く  
ふ  
ゆ  
け  
か  
な

ふ  
ゆ  
山  
を  
わ  
が  
心  
な  
ら  
き  
か  
あ  
け  
ふ

冬  
ふ  
か  
き  
は  
さ  
ま  
く  
か  
け  
か  
け  
り

## 妻

## 一ノ一

行介(コースケ)はいつもの停留所でおりました。おりるとき、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は赤っ茶けた風に押されて歩いて行つた。とき／＼、紙くずや、こつばなぞが、トンボがえりをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行つた。

行介はオーバーのえりを立てていたけれども、それでも、カラウの下まで、つめたい空気が流れこんできた。そのうえ、どうかすると、クギでも投げつけられるように、おゝ粒の砂がバラ／＼と、彼のえり首に落ちてきた。

彼は、横丁にはいったら、いくらか風がよけられるだろう、と思つた。急いで、うちのほうへ曲がる最初の横丁を曲がった。しかし、しばらくしてから、「きようは寒いから、帰りに肉でも買つてこよう。」けさ、出がけに、妻にそう言つたことを思い出した。

そうだ。肉を買つて行つてやらなくては。彼は、また電車どおりを引返して、突きあたりの肉やにはいった。

板まえが肉を切っているあいだ、行介は厚いマナイタの前に立つて、ホーチョーの動くさきをぼんやり追いかけていた。なま肉のにおいが鼻を打つて、彼の胃ぶくろを波だたせた。

マナイタの上に斜に落ちてゐるゆう日が、鋭い刃ものにあたつて反射すると、ちようど油でもはねた時のように、天じようや、肉をぶらさげてある大きなガラス戸ダナに、きらつ、きらつと、ちいさい光をはねかせた。

突然、ふわつとしたものが、ひぎのあたりにからみついた。彼はびっくりして下を見た。ふる新聞が風に吹きまくられて、飛んできたのだつた。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられるように、彼の足もとには、一時の吹きだまりになつたのだ。

「こんなところに突つ立つてると、ざまがないや。」

心の中でつぶやきながら、彼はいま／＼しそくに新聞を往来にけとばした。しかし、べつとりと張りついたようになって、ふる新聞はなか／＼足から離れなかつた。彼はしかたがなしに、ほこりだらけの紙を指でつまんで、かざしにも放してやつた。ほろ／＼に破れた、大きな紙きれは、また往来をころがって行つた。

肉やの店さきに立つたばに、いつも思うことだが、どうも、この、待つてゐるあいだぐらい、まの悪いものはなかつた。

板まえは切つた肉を竹の皮の上に薄くのばして、丁寧にならべていた。それから、ハカリの上に載せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくつた犬のように、黙つてそれをながめていた。

「見並(ミナミ)君。」

肩のところで声が出た。ふり向くと、丸い顔が笑つていた。園田(ソノダ)だつた。

行介はちよつとしゃべたが、向こうが笑つてゐるので、彼もてれ隠しに、ほゝえんで見せるよりほかはなかつた。

「ごちそうだな。」

「いやあ、とんだところを見つかったな。」

一ノ二

「あい変わらずだね。」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい。」

行介はおつかぶせるように言った。「あい変わらずのろいね。」

「あい変わらず女房孝行だね。」「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからないと、思った。

「いや、あい変わらず気がきいてるってんだ。」

「ふん。」

「おれがくることを察して、牛肉を買っておこうなどは、感心だよ。」

「たぶん、そうくるだろうと思っていた。おい、心配しなくてもいいよ。君にはコマ切れを買っておいだ。」

「コマ切れ、コマ切れか。」

「何を言っているんだい。みつともない。」

「おい。——女房にコマ切れを買って帰りけり。つてのは、どうだい。」

「どうもうるさくってかなわいな、迷句をひねくるやつが、そばにいらすと。」

「しかし、実感があってなか／＼いいだろう。」

「うん、たび／＼コマ切れを買いつけてると見えて、その点はさすがだね。」

「まだあんなことを言ってるやがる。もういい加減に降参しろよ。」

「はゝゝゝ。」

「お待ち遠さま。」という声が響いた。そして、竹の皮づつみが行介の前に突き出された。彼はそれを受け取ると、園田とつれ立って肉やの店を出た。

「だが、ぼくがあすこに在ること、よくわかったね。」

「なあに、君の姿は三丁もさきからわかっていた。」

「どうして。」

「ぼくはこの道をやってきたんだもの、つきあたりの店に、君の丸まった背なかが出つばつていりゃ、いやでも目につくじやないか。

おれは道々考えてきたんだが、どうもなんだね、ネコ背つてやつは、なか／＼匂になりにくいね。」

「バカにするな。じゃ、君は、ぼくのところへ行つたのかい。」

「うん、もう帰っているところだと思つて。」

「それなら、待つていてくれればいいのに。」

「おれもそうしようと思つたんだが、だれもいなかったもんだからね……」

「かまやしない。あがりこんで待つてりゃいいじやないか、ぼくのうぢじゃあるまいし。」

「ところが、戸がしまつてゐるんだ。引つばつてみたけれど、あかなくなつたから、しかたがない、帰つてきたのだ。」

「そうか、そりゃ失敬した。じゃ、女房、どつかへ買物に出たんだらう。」

きようは土曜日だし、ちようど園田もやつてきたところだから、久しぶりでひと口やりたいと思つて、行介は途中、取りつけのさか屋に寄つて酒を頼み、うちに帰つた。うちは、園田が言うように、戸がしまつていた。妻はまだ帰つてゐないらしい。彼は裏ぐちにまわつて、あま戸のかけ金をはずした。

一ノ三

なかはまっ暗だつた。

行介は手さぐりで電燈を探し、スイッチをひねつた。それから、急いで玄関に行つて、格子(コーシ)とあま戸をあけた。

「いや、お待ちどお。」

「ほんとうにお待ち遠きまだ。なんだね、肉やのマナイタの前に立たされるのも、いい図じゃないが、戸のしまつたうちの前に、ちょこなんと突つ立ってるのも、あんまりありがたいもんじゃないね。」

園田はへらぎ口をたゞきながら、あがつてきた。

行介は、なが火バチの横にすわろうとすると、煮えたぎつた鉄ビンが、重たいフタをバタリ／＼押しあげているので、彼は立つたまま、あわてて鉄ビンをわきにおろした。「戸じまりをして、外に出て行くくらいなら、火をいけて行けばいいのに。」腹の中で、彼はさすの妻にこごとを言つた。

しかし、じつを言うと、赤々とおこっている火は、吹きつつあらしの中を、冷えきつて帰つてきたからだには、この上もなくうれしいものだった。ふたりは火バチの上に手をかざしながら話し合つた。

園田がやつてきた用むきは、金のことだった。まだ来月と思つていた細君のお産が、急におとしいあつたものだから、てんてこ舞ひをしまつた。で、五十円か、三十円ばかりほしい、と言ふのだつた。ふたりは、しよつちゆう、このくらい金を貸したり、借りたりしている仲だった。園田はずほらのように見えて、案外かたい男で、金銭でまぢがいのあつたことはなかつた。ことにおもしろいのは、それを返しくるとき、味の素だとか、塩せんべいだとか、その利息に相当するくらいのを、いつもきつと持つてくることだつた。行介も、借りたときは、やはりそうすることにしていた。

園田の話は事情が事情だし、それに、ちょうど三十円ばかり手もとにあつたから、さつそく用だてることにした。行介はその話が一段落つくと、台どころに立つて行つて、ネズミイラズだの、戸ダナだのを、しきりにガタバシいわせた。

「何を見つけてるんだい。」

「おかしいな。どこへしまいこんじまつたのかしら。どうも女房がないと、しょうがないな。」

「おい、ごちそうなら、また、ゆつくりなりになるよ。」

「まあ、そんなことを言わないで、ぼくがせつかく買つてきたんだから、肉を突つ突いて行けよ。」

「しかし、奥さんがいないところだからね……」

「きようはバカに遠慮するじゃないか。」

「そういうわけでもないが、金を借りたり、ごちそうになつたりしちゃ、少し話がうま過ぎるからな。」

「いやなことを言うやつだな。そんなことを言つてるひまに、いから酒でもつけといてくれよ。」

今しがた小僧が持つてきた酒のトツクリを、園田の前に押しやつた。

「驚いた。細君がするすだと、おれのほうにまで雷がおつこつてくる。」

「つまらないことを言うなよ。」

「しかたがない。細君が帰つてくるまで、おかん番をつとめてやろう。」

「それだ。恩をきせてから飲もうつてんだから、君は太い料けんだよ。」

「なに、そんなことはありやしないが……」

「ナベ、ナベ、ナベと。いったい、どこへ入れちまやつたのかな。」

「なんだい、牛ナベかい。」

「うん、困つたな。こゝになければと——」

「そのぐあいじゃ、こゝのうちでは、めつたに牛肉なんか食わないと見えるな。」

「飲まないさきからその調子じゃ、飲んだら何を言いだすかわかりやしない。」

「おい、いったい、そんなに飲ませるつもりかい。」

「すぐそんなことを言う。だから、酒のみはいやしうつてんだよ。」

「そのものをはつきり言うもんじゃない。酒がはいらないうちに、まっかになつてしまふじゃないか。」

一ノ四

「へんなもんだな。自分のうちでいながら、台どころときたら、どこに何があるんだか、さっぱりわかりやしない。」

「実際なんだね。いるときには、さほどにも思わないものだが、いないとなると、これで、不自由なものだね。」

「おい、つまらない親切なんか、よしてくれよ。」

「だが、そういうもんじゃないか、いったい、細君なんてものは……」

「あつた、あつた。なあんだ。こんなところに突つこんであつたんだ。」

米ビツの横に二寸ばかりあきがある、その狭いあいだに、牛ナベはむき出しのまま、立てかけてあつた。

「そうか。じゃ、いよ／＼君の しいれてきた牛肉にありつけるわけだね。」

「今までは、どうなることかと案じていたって、言やしないか。はは、さあ、これでネギさえあれば、文句はないぞ。ところで、ネギはと……」

行介は台どころのあげ板を開いて、下をのぞいた。暗いなかによく光つたものが十本ばかりそり返っていた。彼はそれをみんな取り出して水で洗い、あぶなつかしい手つきをしながら、ザクリ／＼切りはじめた。

こうしてネギが買つてあるところを見ると、妻は彼が肉を買つてくることを、忘れていたとは思えない。しかし、今もつて帰つてこないというのは、どうしたわけなのだろう。彼の帰ってくる時間には充分承知のはずだし、それに、その時刻に、うちをるすにするというようなことは、今までに ついぞなかつたことだけに、行介

はホーチョーを動かしていながらも、考えは絶えずそこに走つていた。

「おい／＼、カフスがぬれるよ。」

園田の声で、行介の考えは断ち切られた。

「洋服を着かえたらいいじゃないか。」

「いや、めんどくさい。もうじきだよ。」

「それじゃ、細君のエフロンを前にかけるんだね。そうして、ついでに、あたまに白い帽子をのつけるんだ。」

「バカにするな。」

「おい、新まえのcockさん、指を切らないように頼むよ。」

「大丈夫だよ。だが、こんなことをしていると、君と自炊していたころが思い出されるね。」

「あのときもさ、君はよく指を切つたぜ。おかげで、ぼくは、なんど血ぞめのタクアンを食わされたかしれやしない。」

「しかし、君がいくらかでも血のめぐりがよくなつたのは、あれからだ、と思や腹も立たないだろう。」

「へん、あきれてものも言えやしない。——そろ／＼おチョーシをつけ始めようかね。」

「なんだい。まだやらなかつたのかい。」

「まだやらなかつたかつて、牛ナベが見つかからないうちから、おか／＼をしちや、つき過ぎちまうじゃないか。」

「なるほど、大きにそうだね。——おい、トックリは茶ダンスにはいつているぜ。」

「如才はないよ。もうちゃあんと出してある。」

園田はトックリに酒を移して、しずかに鉄ビンのなかに沈めた。

「え、君。この、ポチャリという音は、なんとも言えないね。」

「そうだね。」

「そうだねは、話せないな。なんじゃないか、芝居で言や、これは幕あきの木みたいなものだ。こいつがポコリだの、ポチャリだのと

きた日には、酒の味はなくなつちまうからね。おれは女房にだつて、こいつばかりは任せはしないよ。——女房つてば、奥がたはバカに遅いじゃないか。」

一ノ五

「女房なんかいなくたつて、かまやしないよ。さあ、できた。」

行介は切つたネギをサラにもつて、洗つた牛ナベといつしよに茶のまに運んだ。

やがて、肉がジューク／＼煮えだして、火バチの上は急に活気づいてきた。

「酒もついたし、肉も煮えてきたし、もう、なんにも言うところはなないや。」

二、三杯ですぐとろんとしてしまふ行介は、目がねの曇りを気にして、度の強い近眼鏡をはずし、息を吹きかけては、しきりにハンケチでふきはじめた。

「これで女房さえ帰つてくりや、だろう。」

園田はゆるやかに、杯をくちびるのところに持つて行きながら、少し目じりをさげて、行介の顔をのぞいた。

「なあに、女房なんか、どうだつていいさ。」

「なんとか言つてら。」

「全くだよ。」

「そんなことを言うと、向こうじゃ、もう帰つてまいりませんよ、と言つてくるぞ。」

「あきれた。こりゃ手ばなしだ。」

「まあ、なんにもありませんけれども、どうか充分めしあがつてくたさい、つて、ところかね。おい、君、こつちのほうを煮えているぜ。」

「おれはもうたくさんだよ。おらあ帰るよ。バカ／＼しい。」

「さようでもございましょうが、これは手まえが買つてまいつた肉でございませうし、こちらは手まえが刻んだ……」

腹の底には何かつめたいものがよどんでいながら、行介はへんにはしゃぎたかつた。しかし、冗談を言っているうちに、自分でも空しくなつて、途中で急にやめてしまった。

園田は帯のあいだから時計を出した。行介はそれを見ると、おどすように、

「おい、帰るのはまだ早いぞ。」

「う、うん。」なま返事をしながら、園田はなお時計をながめていた。

「もう少しいろよ。」

「う、うん。——しかし、遅いな。」

「まだ、そんな時間じゃないだろう。」

「いや、奥さんがさ。——買ひ物にしちや、少しおそ過ぎるじゃないか。」

「……………」

「どこへ行つたか、心あたりはないのかい。」

「そうだね。」

「おい、隣へ行つて聞いてこいよ。ちよつとお尋ねいたしますが、手まえどもの家内はどこにまいりましたらうつて。」

「なんだ。本気にしているかと、すぐちやかしやがる。」

「しかし、女房だよ。何かことづけがあるかもしれないぜ。」

「いいよ。女房なんか、いたつて、いなくたつて。君さえいれば。」

「さあ、一杯いこう。」

「おい、おれを女房と取つちがえちや困るよ。ぼくは奥がたが帰つてくりや、立ちどころに引き取らうつて人間なんだからね。」

「そう帰る／＼つておどかすなよ。」

「いや、そういうわけじゃないけれど、なにしろ、うちのほうがなんだからね……………」

「あ、そうか。はゝゝゝ。——そんなに子どもってかわいいもんかね。」

一ノ六

「まあ、持ってみろよ。」

「いやにおやじぶるな。」

「しかしね、君……」

「驚いたな。これが当年の園田だと思つて。」

「まあ、なんつても言う方がいいさ。人間、子どもを持たないうちは、まだ人生の半分しかわからないんだよ。その意味で、君なんかは半人まえぐらいの値うちつきりないんだぜ。結婚して、まだやつと一年だろう。」

「おい、はじめておやじになつたつて、そう感ばるなよ。」

「いや、べつに感ばりゃしないが、なんだよ、君、子どもつてものは……」

「子ども、子どもつて、そんなに珍しがることはないじゃないか。ぼくなんか、子どもなら、なんにんでも持つているよ。」

「なんにんでも？」

「うん。」

「おい、ほんとうの話かい。」

「ほんとうさ。学校へ行けば、子どもなんかよくしてている。」

「なあんだ。小学校の生徒か。君は、たちが悪いよ。すぐ人をかつかから。」

「いや、かついだんじじゃない。まじめな話だ。」

「バカ／＼しい。学校の子どもなんか、なんにんあつたつて、しかたがないじゃないか。」

「そんなことないさ。」

「いや、君がなんと言つたつて、他人の子じやだめだよ。自分の子でなくつちや。どうも、小学校の先生なんて、しょうがないね。こ

んなことが、わからないんだから。」

「何がしようがないことがあるものか。自分の子だの、他人の子だのと、区別をつけるようじや、学校の教師はつとまらないよ。」

「そりや教壇に立つた時の話だ。まあ、自分の子どもを持つてみろよ。どんなもんだか。」

「いや、そんなものは当分まっぴらだね。」

「はゝゝゝ。実際、女房さえ食わせられないんだからね。——おや、もう九時になる。こりや驚いた。君、すまないが、ぼく、失敬するよ。なにしろ、赤んぼうと産婦とおきつぱなしなんだからね。」

「そうか。そりや悪いことをしたな。あんまり引きとめちゃつて。」

「なあに／＼。じゃ、奥さんが帰つたら、どうかよろしく。」

「近いうちに、赤ちゃんを見せてもらいに行くよ。」

「うん、是非やつてきてくれたまえ。」

園田が帰つたら、家のなかは急にひっそりとしてしまった。行介はつまらなそうに、食器の取り散らされているなかに、ごろりと横になつた。そして、今まで園田がすわつていた座ぶとんを、寝たまま腕をのばして引つぱり寄せ、二つに折つて、あたまの下にあてがつた。

牛ナベは、つゆが切れたとみえて、ジイ／＼火バチの上でうなつていた。焦げつくような異臭が鼻を突いたけれども、彼は起きあがるうともしなかつた。

そのとき、裏のほうで何かガチャガチャンというはげしい音がした。妻が帰ってきたのか、とも思ったが、それにしては、少しするど過ぎる物おどだった。隣の物ほしザオが吹き落とされたのかもしれない。外はあい変わらず風がひどいらしい。

一ノ七

行介は突然むっくり起きあがつて、自分の机のところに行つた。

彼女は急な用事でできて、外出したのかもしれない。何か書いた

ものがおいてありやしなにか。彼はそう思つて机の上を調べたけれども、いや、引きだしの中まで調べたけれども、それらしいものは見あたらない。

「いたい、きぬ子はどこへ行つたのだろう。彼にはまるで見当がつかなかった。園田が言つたように、実際、隣へ行つて聞いてみようか。しかし、それもあんまり気がきかな過ぎる。第一、何かことづつてがあつたらぬなら、さつき、裏ぐちをあげてるときに、隣のおかみさんはおむつを干していたのだから、あのとき、ちよつと言つてくれそうなのだ。黙つていたところをみると、隣にも、なんにも言つて行かなかつたものに相違ない。してみれば、そう手まの取れる用事とも思えない。それなのに、時計はもう九時を過ぎていゝる。

どうかしたら、また、おやじが……

きらつとその考えがきらめいたが、行介は強くそれをうち消した。いくらなんでも、また、おやじがそんなことをしようとは思へられなかつた。近ごろは非常におとなしくなつてゐるようだし、ことに、ふたりの結婚を心から喜んでゐたことは、彼にもはつきり見えていたのだから……

あるには、だれかに誘われて、活動でも見に行つたのだろうか。いや、ゑすにそんなことをする氣づかいはない。見に行くなら、彼が帰つてきてから行つても、充分まに合はずだ。

行介は今はじめて知つたように、あわてて牛ナベを火バチからおろした。ネギがまっ黒になつて、ナベにこびりついてゐた。

彼はチャブ台のそばにおいてあつたさか屋のトックリを引き寄せた。振つてみると、まだいくらか残つてゐるらしい。彼はついでに飲み、ついでに飲み、ありつたけ飲んでしまつた。ひや酒が妙にはらわたにしみ渡つた。

大きなあくびをして、彼は腕をのぼした。からだが目く窮屈だな、と思つたら、洋服を着かえないことに気がついた。

彼は大儀そうに立ちあがつて、タンスの前に行つた。そこには、着がえがちゃんと畳んであつた。彼は妻の心をうれしく思いながら、洋服をぬいで、ふだん着に着かえた。しかし、うしろから着せかけてくれる、やさしい手のないことが、ものたらなかつた。

それから、クツ下をぬいでタビをはこうとすると、足のさきにかカサリとさわつたものがあつた。彼はほん粒を踏みつけた時のような、いやな氣もちがした。

「なんだろう。タビのなかに。」

彼はへんな氣がしながら、タビを裏がえして振つてみた。四角い、桃いろのものが、こぼれ落ちた。

封筒だつた。おもてに「先生さま」、裏に「きぬ子」としてあつた。

バカなことをしたものだ。タビの中に手がみを入れておくやつもないものだ。と、彼は思った。しかし、妻がタビの中に手がみを入れておくことが、あまりに尋常でないので、行介はある恐れをいだきながら、ふるふる手で封を切つた。

#### 一ノ八

先生、おゆるしく下さい。何もかも、あたしが悪いのです。

すつかりお話をしと思つたのですけれど、それがあたしにはどうしてもできないんです。すみません。すみません。

先生、どうかおゆるしく下さい。おゆるしく下さい。くれぐれもおからだをお大事に。

先生さま

きぬ子

行介は手がみを読むと、一層不安になつた。ぼんやり感じていたものに、今、ゴツーンと突きあたつたような氣がした。しかし、おゆるしく下さいとは、何をゆるせということなのか。お話ししたいこ

とがあるのだができない、というのは、いつたい、どんな話なのだろう。その点になると、彼はまた、やはり、なんにもわからなかつた。

あるいは、男でもできたのであろうか。けれども、それについて思いあたるようなことは、彼には一つもなかつた。しいて考えれば、近ごろ、いくらかそわく／＼していたと、思われるぐらいなものであつた。

ひよつとしたら、さつきもちよつと心配したように、父おやがまた何かをたぐんだのかもしれない。あのおやじのことだから、それはやりかねないことだ。きぬ子が手をみをタビの中にそつと入れて行つたということも、おやじにけどられない用意かもしれない。

彼はそう思うと、もうじつとしてはいられなかつた。なんにしても、あれのおやじのところに行くのが、第一だ。よし、彼がかどわかしたのではないにしても、彼のところに行けば、きつと様子がわかるにちがいない。行介は戸じまりをして、外に出た。

おやじのうちは、行介が奉職している小学校の近くだつた。おゝ川を越した向こうだから、かなり遠いけれども、毎日かよい慣れた道だけに、彼はそれほど思わなかつた。

やがて、彼は路地の奥の、その家の前に立つた。もう寝たとみえて、中は暗かつた。ことによると、まだ帰らないのかもしれない、とも思ったが、とにかく、彼は声をかけた。

「今晚は、もうおやすみですか。」

「だれだね。」

「わたしです。」

「あ、あんたか。ちよつと待っておくんさい。」

あま戸のすきから急に光が流れてきたと思うまもなく、戸が開かれた。

「どうもおやすみのところを。」

「なあに。寒いもんだからね、寝どこにもぐりこんじゃいたが、まだ眠つたわけじゃねえんですよ。——今、火を起こしますから……」

おやじの宇平はたきつけを持ってきて、火バチに火を起こしはじめた。

「いや、火も何もいりません。」

「外はえらかつたでしょう。今夜はしみが強いからね。どうも、この風がやんでくれねえと……」

「おとつつあん！」

行介はすぐ事件の中心にはいつて行きなかつた。話題を交えるために、彼はきつぱりしたことで宇平を呼んだ。しかし老人は、たきつけの上に炭を積むことに熱中しているらしく、返事さえしなかつた。

「おとつつあん！」

もう一度、呼んだ。

「え。」

「きょう、きぬ子がこなかつたでしょうか。」

「うんにや。」

火バチの中へ首を突つこんだまゝ、宇平はそつけなく答えた。

こいつ、しらばつておる。それで、首をあげないではないか。行介はそんな気がした。そう思うと、キツネのように口をとがらせて、火を吹いている宇平の顔が、いつそう疑わしく見えてきた。そして、息を吸つたり出したりするたびに、ひたいのあたりが急に赤くなつたり、暗くなつたりするのも、火が反射するためばかりではないようにさえ思えた。

## 一ノ九

「おきぬは——こゝんとこ、さつぱり——きません。」

宇平は火を吹きながら、ときれ／＼のことばで言つた。

「そうですか、ぼくは、また、こつちにきてることとばかり思っていました。」

「うんにゃ、こやしません。たまには顔を見せてもれえてえと思ってるんだが、近ごろはイタチの道でねえ。——あ、やつと起こった。さあ、どうか。——おやく、こりゃ鉄ビンに湯もなくなくなってる。」

「いや、お茶なんかいいですよ。それより、おとつつあん、あなたは隠しているようなことはないでしょうね。」

「隠す。何をわしが隠してる？」

「いや、ぼくはたゞ、はつきりしたことが知りたいのです。それで、何もかも言ってもらいたいと思うんですが。」

「そりゃいい、なんのこつてす。おきぬがどうかしたんですかい。」

宇平がしらばつくれてそう言っているのか、全く知らないでそう言っているのか、行介にはわからなかった。彼は黙ってきぬ子のおき手をみを老人に渡した、老人はしばらくのあいだ、じつとそれを見つめていた。

「あんたは、おきぬをそゝのかして、わしが家出させたでも思ってるんでしょうね。——無理はありません。無理はありませんよ。おきぬのことじゃ、わしはあんたに、どんなに、うたぐられたって、しかたがねえんだから。」

「いや、うたぐるってわけじゃありませんが、あなたなら、しんみの親だから、何か知っていることがあると思つて……」

「いゝや、わしはなんにも知りません。さつきも言つた通り、もう半つきも、こねえんですからね。」

「じゃ、今度のことについて、何かうすく気がついてたつていうようなことはないんですか。」

「そんなことあ、なんにも……」

宇平はまぶたに指をあてて、涙をおさえながら、しくしく泣き

出した。

「どうしたんです。おとつつあん。ぼくが言つたことが気にさわつたのですか。」

「そ、そんなことじゃあ……」

「ぼくは、あまり思いがけないことが起こつたので、かなりあわてていたから、失礼なことを言つたかもしれないが……」

「いゝえ、けてそんなことじゃござんせん。わしはあんたに申しわけがなくて、申しわけがなくて……」

「おとつつあん、まあ、そんなに泣いたつて……」

「あんたのおかげで、あれの身も定まり、わしは安心していたのに。……こんなことをしてかしゃがつて……」

「今さら、そんなことを言つたつて、しかたがありませんよ。それより、どこへ行つたか、そのほうの心あたりはありませんか。」

「わしには皆目わかりません。」

「弱つたな。まさか、死ぬようなことはないだろうな。」

「わしもそれを心配してるんだが、なにしろ、なんで家出したのか、それがわからねえんだから……」

### 一ノ十

ふたりはきぬ子のことについていろいろ話し合つたが、結局、「どうしたんだろう。」「どこへ行つたんだろう。」をくり返すだけに過ぎなかつた。警察に搜索ねがいを出したものでしょうか、ということも、無論、話題にのぼつたけれども、行介の職掌から新聞に出ることは困るので、それはもう少し待つてみることにした。

何かわかつたら、お互に知らせ合うことにして、行介は宇平のうちを出た。宇平がなんにも知らないということとは、行介には意外な気がしたが、しかたがなかつた。

風は昼まよりも強かつた。正面を向いたまゝ歩いては行けないくらいだった。彼は逆流を乗りきる時のように、あたまを前に突き出

し、からだを少し斜にして、黒い流れのなかを押し進んで行った。屋根の上のトタンのカンパンが、騒々しく両がわでわめいていた。停留所には人がかけもなかつた。もうかなり遅い時間だが、まだ赤か、うまく行けば青がくるだろう、と思つて、彼はそこに待つていた。星があぶなつかしく空に光つていた、今にも風で吹き落とされそうに。

行介は立つたまゝ、片ほうの足の甲の上に、片ほうの足の裏をかされて、感じのなくなつてゐる足のさきをこすり合わせた。

電車はなかくこなかつた。彼は未練なような気がしながらも、きぬ子の手がみを、そつとふところから出した。そして、赤い街燈の下で、もう一度それを開いた。

しかし、最初の二字を読んだだけで、彼の目はまっ暗にされてしまった。

「先生、おゆるしください。」

その先生という字が——画(カク)はすくないが、妙にとげ／＼したそのもじが、鋭く彼のひとみに突き刺さつた。目の前がまっ暗になつたと思つた瞬間に、その暗い中に動いてゐるあるものを、行介はきらつと感じ取つた。さつき読んだときは、どうしてこれがわからなかつたのであろう。自分が教師をしているものだから、先生と呼ばれても、べつに気にもとめず、読みすこしてしまつたが……。なるほど、いま自分は教師をしている。そして、きぬ子もまたその教え子であつたにはちがいない。しかし、彼は今その夫であり、彼女はその妻ではないか。自分の夫を、手がみのなかで先生と書くものがどこにある。なぜ、「あなた」と呼びかけないのだ。なぜ、「あなた」と書けなかつたのだらう。あるいは、不用意に、ひよつとこの字を使ったのだとしても、その不用意のうちこそ、恐ろしい真実がこもつてゐるのだ。

結局、ふたりのあいだは、先生と生徒との関係に過ぎなかつたのではなかつたか。彼がどんなに彼女を愛していても、彼女は、彼を

先生以上には感じてゐなかつたのではなかつたか。「あい変わらずだね。」と、友にひやかされるほど、彼はきぬ子をつつくしんできた。この心が、きぬ子には通じなかつたのだらうか。彼女には、教壇に立つてゐる彼の姿ばかりが目について、牛肉をぶらさげて帰る彼、なが火バチのそばにすわつてゐる彼は、少しも目にはいらなかつたのではなからうか。もつとも、園田のような男となら、彼はずいぶん、冗談を言つたり、ふざけたりするのだが、きぬ子の前では、ほとんど、そんなことをしたことがなかつた。もと彼女の教師であつたから、厳格に構えている、というような気もちは少しもないのだけれども、きぬ子にしてみれば、そこにもものたらない何かがあつたのではあるまいか。それが、ついに「先生」になつてしまつたのではあるまいか。

さつき宇平が泣きだしたとき、これもまた例の手ではないか、という疑いが、まだ、あたまのどこかにあつた。しかし、今度の事件は、たしかに、おやじのしわざではない。この「先生」こそ、彼女が離れて行つた原因にちがいない、と行介は思つた。

#### 一ノ十一

やつと電車がきた。赤だつた。行介は急いでそのほうに走り出そうとしたが、どうしたのか、足が一步も前に出なかつた。

「乗らないんですか。」

車掌はベルトのひもをつかんで、せつかに言った。

「いえ、乗るんです。乗るんです。」

行介はあわててそう答えたが、どろ田にはまりこんだ時のように、からだだけ前にのめるばかりで、足は少しも動かなかつた。しかし、急いで彼は両手を電柱に突つぽつて、ぎゅつと腰を浮かした。もげるように足が土から離れた。彼はやつと電車にすがりつくことができた。

「足が悪いんですか。」